



中 田 國 太 郎 選 投稿数14首

電飾にかかわりのなき山里に冬満月の光あまねし 三沢 真下 杏子
 (評) クリスマスが近づくと、至る所に大小様々のイルミネーションが出現し、夜空を華やかに彩る。日本も平和である。そんな電飾とは無縁な山里は、今夜も冬満月の青白い光にすっぽり包まれて静かに眠っている。そんな幻想的な安らぎを与える秀歌である。「電飾」の人工美と「冬満月」の自然美の対比も、心憎い。それに、歌の声調もいい。特に下の句の「冬満月の光あまねし」。吉岡作、歌の進歩に感心。米寿とか、ますますの御健詠を。新井作、農家日記を買って明日に生きる姿勢に感服。

勝敗を気にせず楽し毎日のゲートボールで米寿迎える 皆野 吉岡 ヨシ
 喜寿過ぎて未だ現役なりしわれ農家日記をまた求めたり 皆野 新井 茂
 未来ある尊き命絶つ子等の悲痛すくえぬ世相嘆きぬ 皆野 新井 愛子
 愚痴言えば母にすまぬとこの道に生きて悔いなく針を祭りぬ 皆野 笠原三江子
 杳き日に亡夫と遊びし夜祭の想い出偲びつ遠花火きく 金崎 山田 雅子
 亡き祖母はケンチン汁の具の呼び名でえこんねんじん方言巧みに 皆野 金子善次郎
 朝日出て庭に陣取る大根漬人を和ます役者なる日待つ 三沢 新井 民子
 一と年を顧みるとき何かあらむ息災を唯一の宝と思ふ 三沢 新井 叶子
 身に沁むや還暦前で身罷りし友を悼むや冬寒の夜 上日野沢 四方田利男
 連山の嶺浮かばせて雲海の変り行くさましばし見惚れる 野巻 林 武義
 燃ゆる如真赤に色ずきかえでの葉月の光に名画の如く 皆野 塩田 千代

引 間 豊 作 選 投稿数23句

年輪を一つ重ねて山眠る 三沢 新井 民子
 (評) 枯山に踏み入つても、静けさに耳を奪われ、樹木を見ても根張りが良いとか、枝振りが素晴らしいとか言つことは解るが、中味までは考えが及ばない。樹木が風雪に耐えられるのも強靱な木目であり、その美しさは日本建築の構造を支えている。また成長過程で春より夏までの柔らかい白い部分と、秋より初冬の硬質の茶色い部分が規則正しく、一年に一筋ずつ殖えていく。これを年輪と呼んでいるが、冬の期間中木の成長が滞るこの期間を、俳句では山眠ると呼んで冬の季語になっている。そしてこれだけの説明に算す字数を、俳句でたった十七文字で済ませてしまう便利なものである。

消え残る明星煌り朝時雨 国神 松岡 千恵
 バス停の椅子かへられし霜の朝 下日野沢 引間富美子
 そつと着る友の形見のちゃんちゃ 新年や妻と歩みし半世紀 下日野沢 引間富美子
 んこ 下日野沢 小川 もと 皆野 新井 茂
 善し悪しも今日限りなる除夜の鐘 来年を夢見て花の種を採る 皆野 新井 茂
 金沢 青木富佐子 皆野 大沼シツ子
 木枯しや胸にいだきし宝くじ かさかさと童ころで落葉道 皆野 大沼シツ子
 皆野 植竹美恵子 金崎 浅見富美子
 夜祭りの山車動くとき騒めける ダンプカーつれゆく落葉の競技会 金沢 関和 トヨ
 三沢 新井 叶子 金沢 関和 トヨ
 寒林のしじま毀さぬ人とあり 風花や少女の瞳煌めけり 下日野 藤田 稔
 下日野 中田 久恵 下日野 藤田 稔

俳句・短歌を募集
 作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して
 企画課へお寄せください。
 1人1句、1首に限ります。

8日必着